



## Bhagavati Aradhanaと白衣派文献

著者	河? 豊
雑誌名	人間文化研究所年報
号	26
ページ	15-26
発行年	2015-08-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000489/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000489/</a>

# *Bhagavatī Ārādhana* と白衣派文献

河 崎 豊

## *The Bhagavatī Ārādhana* and the Śvetāmbar Jain Literature

Yutaka KAWASAKI

### 0. はじめに

ヤーパニーヤ派とされるシヴァーリア (Śivārya) が著した *Bhagavatī Ārādhana* [BhĀ] は、現在では空衣派のいわゆる代用聖典のうちの *caraṇānuyoga*<sup>1</sup> に配当され、断食死次第を中心テーマとしつつ、同時にジャイナ教教義をも豊富に説く一大作品である。2000詩節を超える雄編である BhĀ を、シヴァーリアがどのような知的源泉をもとに作成したのかを解明することは、重要な課題である。どの程度 BhĀ にはそれまでのジャイナ教とは異なる独自要素が盛り込まれているのか。BhĀ は全てシヴァーリアによって著されたのか。後代の付加はないのか。そもそもシヴァーリアは BhĀ を「著した」のか、あるいは編者の如き役割だったのか。このような疑問に答えるためには、シヴァーリアがいかなるバックグラウンドを有していたかについての知識が必要である。しかし、この点について満足のいく解答を与えるまでには研究は進展しておらず、予備的な研究の殆どが残されたままとされている。就中、OKUDA (1975) が同じく空衣派代用聖典の *Mūlācāra* 第5章に対し徹底的に行なったように、個々の記述についてそれと一致あるいは類似するものを他の諸文献に探ること、簡単に言えば平行・類似詩節／文の一覧作成は、如上の問題を考える上で避けて通ることのできない基礎作業であろう。この作業は、シヴァーリア以降 BhĀ がどのようにジャイナ教徒に受容され、後の文献に影響を与えてきたのか<sup>2</sup>を考察する際にも欠かすことができない。

更に、この種の一覧作成は白衣派聖典の伝承問題にも寄与するであろう。現存白衣派聖典の伝承が様々な次元で問題を抱えていることは、河崎 (2014a) で扱った通りである。その拙稿で筆者は *Uttarajjhāyā* 第2章を取り上げ、現存する諸写本には見出されず、ただ諸注釈において引用の形でのみ提示される「別の読み *pāṭhāntara*」を、歴代注釈者たちがどのように処理するか、

という視点から議論した。もちろん、これだけが白衣派聖典の伝承を考察するための唯一の手法であるはずがなく、他にも様々なアプローチが試みられてきた。そのひとつが、白衣派聖典以外の文献で引用される白衣派聖典と思しき記述を抽出する、という手法である。近年、渡辺研二はこの視点から幾つかの研究を公表した<sup>3</sup>。そこで用いられた白衣派聖典外の資料のひとつが、BhĀ に対して同じくヤーパニーヤ派とされるアパラージタ (Aparājita) が記した注釈中で引用される諸記述である。白衣派聖典の伝承史研究に改めて問題提起をしたものとして、渡辺の諸研究は極めて重要だが、シヴァーリア自身の記すところ — つまり BhĀ 自身の記述までは踏み込んでいない点に、研究の余地が残されている。

筆者はこれまでも BhĀ の知的源泉を探るべく幾つかの基礎的な研究を公表してきた<sup>4</sup>が、本稿は以上で述べた諸点を踏まえ、アパラージタと白衣派聖典との関係のみならずシヴァーリアと白衣派ジャイナ教聖典との関係をも窺い得る一資料を提示した上で、そこから窺うことのできる諸問題について議論する。

## 1. BhĀ 1117-1118

かつて LEUMANN (1934: 3) が指摘し、先述した渡辺研二による諸研究でも明らかになった通り、BhĀ に対するアパラージタの注釈が白衣派ジャイナ教聖典と思しき文献をしばしば引用すること、そしてその記述が現存の白衣派聖典の対応箇所と齟齬することは、比較的良好に知られた事実であろう。一方で、当のシヴァーリアが白衣派聖典についてどのような知識を有していたかについて、我々の知識は貧弱なままである。もちろん、白衣派聖典の成立年代が未だ不透明なこと<sup>5</sup>、またシヴァーリアに現在与えられている 1 世紀頃という年代も決定的ではない<sup>6</sup>現状では、「シヴァーリアがいかなる白衣派聖典を知っていたか」という問いそのものが問題を含んでいるとも言えよう。仮に BhĀ と白衣派聖典との間に明白な平行関係が見いだされる<sup>7</sup>として、一方から他方への単純な影響関係を想定することはしばしば困難である。

従って、「シヴァーリアがいかなる白衣派聖典を知っていたか」という問いへの有効な答えを求めるとは、今のところは白衣派聖典 (の少なくともある部分) がシヴァーリア以前に成立していたという仮定の上で、更にシヴァーリアが白衣派聖典からの引用であることを何らかの形で明示しているか、あるいは白衣派聖典の存在を前提としていることが明確な記述を探し出すことが必要になると思われる。実際にはこのような例を探すことは容易でないが、BhĀ1117-1118は BhĀ 成立時に既に存在したスートラ (sutta) を前提としていることが詩節自身によって明示されていると考えられ、一考に値する。とはいえ、その記述をアパラージタの注釈と共に考察すると、幾つかの問題が明らかになってくる：

desāmāsiyasuttaṃ ācelakkaṃ ti taṃ khu ṭṭhidikappe /

lutto ttha ādisaddo jaha tālapalaṃbasuttammi //BhĀ 1117//

na ya hodi saṃjādo vatthamittacāgeṇa sesasaṃgehiṃ /

tamhā ācelakkaṃ cāo savvesi hoi<sup>8</sup> saṃgāṇaṃ //BhĀ 1118//

承知の通り、維持規定における「無衣状態」という当の〔ことば〕は〔放棄すべき対象の〕一部だけに触れたストラである。〔あるいは寧ろ<sup>9</sup>〕 tālapalamba というストラにおいて、そこで ādi という語が省略されているようなものである (1117)。そして、衣類のみの放棄によっては自制者とならない。〔衣類のほかにも〕残余の諸々の執着物〔がある〕からである。従って、「無衣状態」〔ということば〕は、あらゆる諸々の執着物の放棄〔の同義語として理解すべきもの〕となる (1118)。

無所有の掟 (aparigrahavrata) を説く冒頭に出現するこれら両詩節の内容は、BhĀ 423でシヴァーリアが示した情報が前提となっている。すなわち、BhĀ 421-422においてシヴァーリアは「正しい行を具えた者 (āyāraṃ)」に対してオルタナティブな定義を提示する。その第二の定義<sup>10</sup>は「あるいは、アーチャーリヤが常に十種の維持規定に立脚し、教えの母たち<sup>11</sup>に結びついていれば、この者は承知の通り、正しい行を具えた者である (BhĀ 422:dasavihaṭṭhikappe vā havejja jo sutṭhido sayāyario / āyāraṃ khu eso pavayaṇamādāsu āutto //)」というものである。ここで言及される「維持規定 ṭṭhikappa」を分類したものが続く BhĀ423であり、「(1) 無衣状態 ācelakka (2) 指定食の放棄 uddesiya (3) 寝床の維持の放棄 sejjāhara (4) 王族からの施食の放棄 rāyapimḍa (5) 敬意を示す行動の実践 kiriyamma (6) 禁戒の維持 vada (7) 女性に対する優位性の維持 jeṭṭha (8) 反省 paḍikkamaṇa (9) 雨季の定住期間以外に一ヶ月以上同一箇所逗留することの放棄 māsa (10) 雨季の定住 pajjosavaṇakappa (ācelakk'-uddesiya-sejjāhara-rāyapimḍa-kiriyamme / vada-jeṭṭha-paḍikkamaṇe māsaṃ pajjosavaṇakappo //)<sup>12</sup>」であるとされる。BhĀ の中で第423詩節以外に維持規定について述べるものは見当たらないから、1117詩節の1行目でシヴァーリアが「維持規定における「無衣状態」という当の〔ことば〕は〔放棄すべき対象の〕一部だけに触れたストラである」と言う時のストラとは、BhĀ423を指すと理解するのが最も無理がない。

そして、BhĀ423で述べられる十種の維持規定の冒頭を飾る ācelakka は、文字通りの単なる「無衣」ではなく、放棄すべき対象の一部だけに触れていると理解すべきこと、あるいは、この表現には ādi が省略されており、実際には衣を含めたあらゆる執着対象の放棄が含意されていると理解すべきだ、というのがシヴァーリアの主張であり<sup>13</sup>、ādi が省略されていることの教証としてシヴァーリアが引用するものが、tālapalambasutta なる第二のストラである。

tālapalamba という語は、現行 BhĀ ではこの詩節にのみ出現する。また筆者が確認した限り、BhĀ の他の詩節において当該語を暗示させるような内容を持つものも、見出すことができない。よって、BhĀ 1117の1行目に現れた sutta が BhĀ423を指していたのとは異なり、tālapalambasutta とは BhĀ 以外の何らかの資料から、シヴァーリアによって教証として引用されたものである可能性を考えねばならない。では、tālapalambasutta とは何なのか。

## 2. アパラージタ注

ここで、1117詩節に対しアパラージタが示した理解<sup>14</sup>を確認しよう：

... celagrahaṇaṃ pariagrahopalakṣaṇaṃ, tena sakalagranthatyāga ācelakyaśabdasyārtham iti. tālapalaṃbaṃ na kappadi ti sūtre tālaśabdo na taruviśeṣavacanaḥ, kin tu vanaspatyekadeśas taruviśeṣa upalakṣaṇāya vanaspatināṃ gṛhitaḥ. tathā coktaṃ *Kappe*:

*haritatanosahigucchā gummā vallī ladā ya rukkhā ya /*  
*evaṃ vaṇaṃphadīo tāloddeseṇa ādiṭṭhā //*  
*tāledi daledi tti va taleva jādo<sup>15</sup> tti ussido va tti /*  
*tālādīṇo taru tti ya vaṇaṃphadīṇaṃ havadi nāmaṃ //*

…cela という表現は parigraha を暗示している。それゆえ執着の対象 (grantha)<sup>16</sup>全体の放棄が ācelakya という語の意味である。tālapalaṃbaṃ na kappadi というスートラにおける tāla という語は、特定の樹木〔を意図した〕言葉ではなく、植物〔一般〕の一部としての特定の樹木が、〔他の〕諸植物を暗示するために表現されているのである。そして同様に、『カップ』では〔以下のように〕述べられている：

『野菜、草、薬草、藪、茂み、蔓、蔦、諸々の木 — このように諸々の植物が tāla という言及によって示されている。「～が打つ」あるいは「～がはじける」というのが tāla に他ならず<sup>17</sup>、「生じた」あるいは「生長した」という〔意味である〕。tāla などの木という諸々の植物の名称となる』

ここでアパラージタは、問題となるスートラが tālapalaṃbaṃ na kappadi という文章である（少なくともそのような文章を含む）ことを明示した上で、tāla を単一の植物を示す語としてではなく、「ターラなどの木」という諸々の植物を指す総称として理解するべきである、という *Kappa* なる韻文文献を引用する。この *Kappa* からまず想起されるのは *Bṛhatkalpabhāṣya* [BK Bh] か、あるいはその注釈先である *Bṛhatkalpa* [BK] であろう。そこで tālapalaṃbaṃ という語を調べてみると、既に校訂者である Kailaschandra Shastri が参照を促す通り、BK の冒頭である 1.1-5 に件の語を含む一連の記述が存在することがわかる。

## 3. BK 1.1-5

BK 1.1-5の内容は以下の如くである：

no kappai nigganthāṇa vā nigganthīṇa vā āme tāla-palambe abhinne paḍiggāhettae (BK 1. 1)  
ジャイナ教男性修行者たちであれ、ジャイナ教女性修行者たちであれ、熟しておらず、断たれていない、ターラ樹（オオギヤシ）からぶら下がるもの<sup>18</sup>を受け取ることは適切ではない。

kappai nigganthāṇa vā nigganthīṇa vā āme tāla-palambe bhinne paḍiggāhettae. (BK 1. 2)  
ジャイナ教男性修行者たちであれ、ジャイナ教女性修行者たちであれ、熟しておらず、断たれている、ターラ樹からぶら下がるものを受け取ることは適切である。

kappai nigganthāṇaṃ pakke tāla-palambe bhinne vā abhinne vā paḍiggāhettae (BK 1. 3)  
ターラ樹からぶら下がるものが熟していれば、〔それが〕断たれているものであれ、断たれていないものであれ、ジャイナ教男性修行者たちが受け取ることは適切である。

no kappai nigganthīṇaṃ pakke tāla-palambe abhinne paḍiggāhettae. (BK 1. 4)  
熟しており、断たれていない、ターラ樹からぶら下がるものを、ジャイナ教女性修行者たちが受け取ることは適切ではない。

kappai nigganthīṇaṃ pakke tāla-palambe bhinne paḍiggāhettae, se vi ya vihi-bhinne, no a-vihi-bhinne. (BK 1. 5)

熟しており、断たれている、ターラ樹からぶら下がるものを、ジャイナ教女性修行者たちが受け取ることは適切である。その〔断たれたもの〕も、規定に基づいて断たれたもの〔の受持は適切〕であり、規定に基づかずに断たれたもの〔の受持は適切〕ではない<sup>19</sup>。

ここでの主題は、tālapalamba を受け取る際の適不適を、受け取り手が僧か尼か、tālapalamba が熟しているか熟していないか、またそれが未切断か切断済みか、という視点から分類してその基準を示したものであるから、これら一連の文章は「tālapalamba というストラ」と呼ばれる資格を具えている。更に管見の限り、tālapalamba に主題を絞って議論を行なうものは、白衣派聖典ではここ以外に見当たらない。ゆえにシヴァーリアの引用に限定すれば、彼が予想しているストラが実際に BK1. 1-5 であるという想定は許されるだろう<sup>20</sup>。つまり、シヴァーリア以前に BK は既に現行の形態を持って成立しており、彼は実際に白衣派聖典としての BK を見ていたという可能性である。

しかし、アパラージタ注が引用する文章を考慮すると、そのような想定は留保せざるを得ないようにも思われる。最初の問題は、アパラージタが引用する tālapalambaṃ na kappadi という一文が、そのままの形では BK には見出されない点である。勿論、様々な推測が可能ではある。例えば、シヴァーリアが知っていたストラと、アパラージタが参照し得たそれとでは読みが異なっていた可能性である。また、アパラージタが本来は BK の如き読みであった文章の順序を故意に入れ替え、更にそれを省略して提示したという可能性も考えられる — かかる改変をアパラージタ自身が行なった理由を推定することは難しいが。

もうひとつの問題は、アパラージタの引用に見られる“kappadi”である。この語形が Ardhamāgadhī でも Jaina Māhārāṣṭī でもないこと、つまり白衣派の聖典・注釈文献に用いられる言語の

特徴とは考え難い点<sup>21</sup>には注意が必要である。この点も、アパラージタにとってより自然な語形に彼自身が改変した可能性は有り得るが、アパラージタが参照した元ソースが既に kappadi という読みであったと考える方が自然であるとも見ることできる。仮に後者の如く考えることが許されるなら、その元ソースとは、我々には今のところ未知の、ヤーパニーヤ派の中で権威を有していた文献 — 極言すれば BK と並行関係を有する「ヤーパニーヤ派版 BK」 — であった可能性をも視野に入れる必要がある<sup>22</sup>。そしてそのような文献が、白衣派聖典とは別にシヴァーリアの時点で既に成立していた可能性も、現時点では否定できない。

以上の問題は、アパラージタが権威あるものとして引用していることが明白な *Kappa* なる文献にも当てはまる話である。語形上の問題は無論のこと (ussido や havadi など)、BK にこのような韻文は存在せず、BKBh にも、これに100%対応する詩節を見出すことはできない。

#### 4. 「ādi の省略」という解釈

では、シヴァーリアが示す「tālapalamba というストラでは ādi が省略されている」という理解についてはどうか。まず、BK 1.1-5 が ādi の省略を意図していたか否かを判断する材料は、管見の限り BK 自身には存在しない。よって BK からは、BK 1.1-5 の成立期の当初からそのような理解が存在したかどうかを判断することはできない。しかし BKBh になると、シヴァーリアやアパラージタ同様、当該の表現は tāla という単一の品種のみを指すのではなく、植物全般を指す表現であると解釈される。その解釈を提示する BKBh856 は、クシェーマキールティ (Kṣemakirti) の注釈を踏まえると以下の如く訳し得る：

tala-gaṇāṇā u talassā na kappe sesāṇa kappāi nāmaṃ /  
ega-ggaṇāṇā gahaṇaṃ diṭṭhanto hoi sāliṇaṃ //BKBh 856//

【問】しかし、tala という表現から、tala 樹の〔根などを受容することだけが〕不適切で、残余の諸々の〔樹木の根などを受容することは〕適切だということ〔になってしまう〕。

【答】単一〔の品種〕の表現から、〔それと同種の全てのものが〕表現〔されるのである<sup>23</sup>。この場合は〕諸々のシャーリ米の喩例が〔適用される〕。

BKBh の解釈によれば、単一の種を指す言葉であっても、それと同種のもの全てが含意されると理解するべきだ、という。但しそこで著者サンガダーサ (Saṅghadāsa) が言う「シャーリ米の喩例」については、BKBh 自身からは何を意図したものか明らかとならない。クシェーマキールティによると、例えばある者が「シャーリ米が実った (niṣpannaḥ śāliḥ)」と言う場合、シャーリ米は単数形である。だからといって、シャーリ米の一粒だけが実ったことをこの者は伝えたいのではなく、その品種全体が実ったということと言おうとしているのである。それと同様、tālapalamba なる表現も tāla だけではなく全ての諸樹木の類の pralamba が含まれていると理解するべ



きだ、という<sup>24</sup>。

このように BKBh では、tāla が単一の品種を指すのではなく他の植物を含めた総称として用いられている、という解釈が明示される。もっとも、シヴァーリアアアパラージタの如く端的に「ādi が省略されている」と説明する箇所は、管見の限り BKBh に見出すことができない。また前節でも述べた通り、アパラージタが引用する *Kappa* なる韻文文献と完全に一致する詩節も BKBh には存在せず、*Kappa* では示されている tāla に対する語源解釈も BKBh には存在しない<sup>25</sup>。

## 5. おわりに

以上、BhĀ1117 に出現する tālapalambasuttammi という表現を手掛かりに、シヴァーリアアおよびアパラージタと白衣派聖典との関係を考えてきた。最後にそれらを纏めておく：

1. BhĀ 1117 の tālapalamba- という語は BK 1. 1-5 に連続的に出現する。シヴァーリアの引用を見る限り、彼が言及する tālapalambasutta が BK 1. 1-5 を指すという想定は可能である。
2. BhĀ 1117 の tālapalambasuttammi をアパラージタは “tālapalambaṃ na kappadi” という形で引用する。この読みを含む一文は現行 BK には存在しない。彼が *Kappa* という名の下で引用する韻文文献についても BK の中には平行箇所が見出せず、BKBh にも存在しない。
3. tāla は単一の品種を指す語ではなく、他の植物の総称として理解すべきだという理解が、BK の成立時に既に存在していたか否かは不明である。BKBh の段階では、シヴァーリアアアパラージタと表現は異なるが、同様の理解が見られる。

BhĀ 1117 が提示する tālapalambasutta は、シヴァーリアの知的源泉を具体的に示す可能性があり、そういった明確な情報が BhĀ の中で見出し難い現状では貴重な記述と言えよう。しかし、それに対して注釈を記すアパラージタの引用状況を踏まえると、更に様々な推定が可能なことは上で述べた通りであって、我々にとっては未知の、いわばヤーパニーヤ派版 BK の如き存在<sup>26</sup>の可能性をも視野に入れねばならない。本稿は僅か一例に基づいて可能性を指摘しただけであり、今後も引き続きいかなる些細な記述も慎重に検討して、同種の情報を丁寧に回収していく必要がある。

【付記】本稿は、2014年10月25日に大谷大学で開催されたジャイナ教研究会29回研究会で「*Bhagavati Ārādhana* と白衣派文献」と題し口頭発表した内容の一部を新たな視点からまとめ直したものである。その発表で取り上げた十種の性的衝動 (daśa kāmāvasthāḥ) については、河崎 (2014b) を参照された。なお本稿は平成24年～26年度科学研究費補助金 (若手B) による研究成果の一部である。



## 【一次文献】

- Āy *Āyāraṅga*. JAMBUVIJAYA (ed.), *Āyāraṅga-suttam [Ācārāṅgasūtram]*, Jaina-Āgama-Series No.2 (I), Bombay, 1977.
- ĀyŚ Śilānka's Commentary on Āy. PUṆYAVIJAYA (ed.), JAMBUVIJAYA (re-ed.), *Ācārāṅgasūtram and Sūtrakṛtāṅgasūtram with the Nirukti of Ācārya Bhadrabāhu Svāmī and the Commentary of Śilānka-ācārya*, Delhi, 1978.
- ĀPV Virabhadda's *Ārahaṇāpadāyā*. PUṆYAVIJAYA & A.M. BHOJAK (eds.), *Paiṅṇayasuttāim Part II*, Jaina-Āgama-Series No.17-2, Bombay, 1987.
- BK *Bṛhatkalpa*. →SCHUBRING (1905)
- BKBh *Bṛhatkalpabhāṣya*. Willem B. BOLLÉE (ed.), *Bhadrabāhu Bṛhat-kalpa-niryukti and Sanghadāsa Bṛhat-kalpa-bhāṣya*, 3 vols., Stuttgart: Franz Steiner, 1998.
- BKBhK Kṣemakīrti's Commentary on BKBh. CATURVIJAYA & PUṆYAVIJAYA (eds.), *Bṛhat Kalpasūtram*, Volume 2, Ahmedabad, 2002.
- BhĀ *Bhagavati Ārādhana*
- (1) KAILĀSCANDRA (ed.), *Ācāryaśrī Śivārya viracit Bhagavati Ārādhana*, Jīvarāj Jain Granthamālā Hindi Vibhāga Puṣpa 36, Solapur 2004. [ J 版, BhĀ の詩節番号及びアパラージタ注はこの刊本による ]
  - (2) Śrī Śivakoṭi ācārya viracit Mūlārādhana, Śrī Svāmī Devendrakīrti Digambara Jaina Granthamālā 2, Solapur, 1935. [ D 版, アーシャーダラ注とアミタガティの chāyā はこの刊本による ]
- VBh *Vyavahārabhāṣya*. MUNICANDRA (ed.), *Śrīman-Malayagirisūri viracitavivaraṇayuta Nirukti-Bhāṣyasametam Śrī Vyavahārasūtram uddeśa-1 bhāga* 2, Surat, 2010.

## 【二次文献】

- FUJINAGA, Sin
- (2007) "Digambara Attitudes to the Śvetāmbara Canon," *International Journal of Jaina Studies* (Online), 3-5, 1-11.
- JAINI, Padmanabh S.
- (1979) *The Jaina Path of Purification*, Berkeley.
- KAPADIA, Hiralal Rasikdas
- (2000) *A History of the Canonical Literature of the Jainas*, Ahmedabad.
- 河崎 豊
- (2010) 「anuprekṣā における生死 — Bhagavati Ārādhana を中心に —」『日本仏教学会年報』75, 69-80.

- (2011a) “Anatomy in the Bhagavati Ārādhana,” 『印度学仏教学研究』 59-3, 1109-1115.
- (2011b) 「ジャイナ教の三宝に関する若干の考察」『中央学術研究所紀要』 40, 25-39.
- (2012) “Virabhadda’s *Ārāhanāpadāyā*: A Preliminary Report,” 『印度学仏教学研究』 60-3, 1161-1168.
- (2013a) 「*Bhagavati Ārādhana* 873-874」『中央学術研究所紀要』 42, 58-72.
- (2013b) 「*Bhagavati Ārādhana* における「真実」と「虚偽」」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』 24, 29-43.
- (2014a) 「Uttarajjhāyā の諸伝承」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』 25, 19-30.
- (2014b) 「*Bhagavati Ārādhana* が記す *daśa kāmāvasthāḥ*」『待兼山論叢哲学篇』 48, 69-80.

LEUMANN, Ernst

- (1934) *Übersicht über die Āvaśyaka-Literatur*, Hamburg.

OETJENS, Karl

- (1976) *Śivāryas Mūlārādhana: Ein Beitrag zur Kenntnis der Sterbefasten-Literatur der Jainas*, Dissertation zur Erlangung der Würde des Doctors der Philosophie der Universität Hamburg, Hamburg.

OKUDA, Kiyooki (奥田 清明)

- (1973) 「Pavayaṇa-māyāo」『四天王寺女子大学紀要』 6, 1-14.
- (1975) *Eine Digambara Dogmatik: Das fünfte Kapitel von Vattākeras Mūlācāra*, Wiesbaden.

SCHUBRING, Walther

- (1905) *Das Kalpa-sūtra: Die alte Sammlung jainistischer Mönchsvorschriften*, Leipzig.

渡辺 研二

- (1995a) 「Ācāraṅga-sutta Bhāvaṇā 章異本考 — Yāpaniya 派の伝承から —」『印度学仏教学研究』 43-2, 984-979.
- (1995b) 「マハーヴィーラ伝記の伝承について」『ジャイナ教研究』 創刊号, 25-44.
- (1998) 「「無衣の試練」(acela-parisaha) に関する二つの異なった伝承 — Uttarajjhāyā II. 12-13と Viyajodayā ad Mūlārādhana 421」『ジャイナ教研究』 4, 45-53.
- (2000) 「Āyāranaga-sutta におけるテキストの伝承について — ジャイナ教の聖典成立に関する若干の考察 —」『印度学仏教学研究』 48-2, 1120-1116.
- (2001) 「現存ジャイナ教聖典の伝承 — 編集の痕跡と証拠 —」『印度学仏教学研究』 49-2, 969-967.

WILES, Royce

- (2006) “The Dating of the Jaina Councils: Do scholarly presentations reflect the traditional sources?” Peter Flügel (ed.), *Studies in Jaina History and Culture: Disputes and dialogues*, London & New York, 61-85.

## 注

- <sup>1</sup> 空衣派のいわゆる代用聖典における anuyoga と呼ばれる諸カテゴリーについて、簡便には JAINI (1979 : 78-87) を参照されたい。
- <sup>2</sup> ĀPV との関係については、予備的な報告を河崎 (2012) で行なったので参照されたい。
- <sup>3</sup> 渡辺 (1995a) (1995b) (1998) (2000) (2001) などを参照されたい。
- <sup>4</sup> これまでの筆者の研究を挙げておく : 河崎 (2010)、(2011a)、(2011b)、(2012)、(2013a)、(2013b)、(2014b)。現時点で判明している、BhĀ と他文献との平行・類似詩節／文の一覧は、『ジャイナ教研究』21号で発表予定である。
- <sup>5</sup> この点については、WILES (2006) 及びそこで挙げられる諸研究を参照されたい。
- <sup>6</sup> OETJENS (1976 : 12-25) がこれまでの研究を纏めた上で1世紀前半という年代を提示している。これらの研究はジャイナ教徒が残した僧正系譜とジャイナ教徒がマハーヴィーラ入滅から起算した伝統的な年代論を多かれ少なかれ基礎としていることには注意が必要である。
- <sup>7</sup> BhĀ の主題である断食死次第の詳細は、白衣派聖典もしばしば記すところである。特に Painṇa 中で同様のテーマを掲げる若干の韻文経典、例えば *Bhapparinṇā* と BhĀ との間には、しばしば顕著な並行関係が見出され、双方の時代的前後関係は当然問題となる。ところで KAPADIA (2000 : 47) は、*Bhapparinṇā* がマハーヴィーラから直に dikṣā を受けた Virabhadra 某によって著されたという伝承を紹介している。この伝承を鵜呑みにすることは無論できないが、一般に非常に成立が新しいと言われる Painṇa 諸経典の具体的な成立年代についても確たることは何も言えないのが現状である。
- <sup>8</sup> 2刊本ともに hoi があるが、削除すれば韻律は正常化する。またそうすることで1118は ĀPV652と完全なパラレルになる。
- <sup>9</sup> アパラージタも、もう一人の注釈家であるアーシャダラ (Āśādhara) も、等しく *athavā lutto ttha ādisaddo ...* としているが、シヴァーリアの真意を反映した解釈か否かは問題である。もっとも、アミタガティ (Amitagati) による当該詩節の *chāyā* でも *lupto 'thavādisabdō 'tra tālaprāmbasūtravat* とあり、*athavā* を補うことが伝統的な解釈として定着していたようである。
- <sup>10</sup> 第一の定義は BhĀ 421で示され、「[jñāna, darśana, cāritra, tapas, vīrya という] 五種類の正行を、違反なく行ない、行なわせ、正行を指導する者 — こういう者を、正しい行を具えている者という」(āyāraṃ paṃcavihaṃ caradi carāvedī jo ṇiradicāraṃ / uvadisadi ya āyāraṃ eso āyāraṃ ṇama //) である。五種類の正行については OKUDA (1975) を参照されたい。*Mūlācāra* 第5章のテーマはこれら五種類の正行である。
- <sup>11</sup> この概念については、奥田 (1973) を参照されたい。端的に言えば5 samiti と 3 gupti からなる。
- <sup>12</sup> 和訳はアパラージタ注を踏まえたものである。本詩節は ĀPV 256と類似する。またアパラージタは各項目について詳細な注を記しているが、ここではそれらの検証は省く。
- <sup>13</sup> シヴァーリアがこの理解を提示するのはここが最初である。アパラージタは既に BhĀ 423への注釈冒頭で、*cela* という表現が *parigraha* を暗示するものとし、実際には一切の所有対象の放棄を指すという

理解を示している (p.423: celagrahaṇaṃ parigrahopalakṣaṇaṃ, tena sakalaparigrahatyāga ācelakyam ity ucyate)。

<sup>14</sup> アーシャーダラによる解釈はアパラージタのそれとはほぼ同じであるため省略する。アパラージタが引用する *Kappa* なる文献については完全に同一のそれをアーシャーダラも引いている。

<sup>15</sup> J版・D版共に jāde とあるが不審。

<sup>16</sup> BhĀにおいて grantha は「執着の対象としての所有物」の類義語として使用されている。この点については、将来 BhĀにおける parigraha を検討する際に改めて議論したい。

<sup>17</sup> tāledi daledi tti va taleva は難解である。筆者が与えた訳は暫定的なものに過ぎない。

<sup>18</sup> SCHUBRING (1905 : 48) は Palmzapfen と訳す。ただし SCHUBRING (1905 : 37) が指摘する通り、後の注釈家、例えばクシェーマキールティは、tāla を「タラ樹の実」、palamba を「根」と理解し、当該の複合語は collective dvandva だと見做す (p.257: talah vṛkṣaviśeṣas tatra bhavaṃ tālaṃ tālaphalaṃ prakarṣeṇa lambate iti pralambaṃ mūlam tālaṃ ca pralambaṃ ca tālapralambaṃ samāhāradvandvaḥ)。この解釈は、BK1. 1を引用する VBh 183 (duhato bhinna palambe māsiyasohi u vaṇṇiā kappe / tassa puṇa imaṃ dānaṃ bhāṇiyaṃ āloyaṇavihi ya //) に対するマラヤギリ (Malayagiri) の注釈でも見られる (pralambaṃ mūlam ... talo vṛkṣaḥ tatra bhavaṃ tālaṃ tālavṛkṣaphalaṃ)。なお Āy II 1, 8 (376) では tālapalamba を含む幾つかの palamba の類 (palambajātaṃ) が列挙された上で、それらが生でナイフによる変容を被っていない (āmaṃ asatthaparīṇataṃ) ならば、男女ともに修行者がそれを受け取るべきではないとされている。この箇所に対し ĀyŚ (348b) は palambajāta を phalasāmānya と説明するに過ぎないが、解釈としては BKBh 等よりも自然であろう。

<sup>19</sup> 男女間で受持の条件に差がつく理由を、BK は明らかにしていない。この箇所を直接説明する BKBh 1046を、クシェーマキールティ注を参照しつつ見てみると、この差は例えば仏教の比丘尼集団が比丘集団より多くの学処を課せられるのとは異なり、ジャイナ教では女性修行者たちには男性修行者よりも多い6つのヴラタあるいは二倍のヴラタが課せられるということはなく、不淫のヴラタ (brahmavrata) を守るがゆえに、女性修行者に未切断のものは許可されていない (na vi chammahavvayā nevaṃ duguṇiyā jaha u bhikkhuṇivagge / baṃbhavayarakkhaṇaṭṭhā na kappatī taṃ tu samaṇiṇaṃ //) という。

<sup>20</sup> Kailaschandra Shastri はそのように考えているように思われる。

<sup>21</sup> この現象は、アパラージタが白衣派聖典と思しきものを引用する他の箇所でも確認できる。例えば BhĀ 423に対する注釈 (p. 327) でアパラージタが「『ダシャヴァイカーリカー』で述べられている (daśavaikālikāyāṃ uktaṃ)」として引用する、ṇaggassa ya muṇḍassa ya dihalomaṇahassa ya / mehuṇādo virattassa kiṃ vibhūsā karissadi //における mehuṇādo あるいは karissadi の如くである (ちなみにこの詩節は *Dasaveyāliya* 6.64 [Jaina-Agama-Series] とかなり一致する)。同様に、*Ācārāṅga* として彼が引用する sudam me ... bhagavadā evam akkhādam における sudam や bhagavadā、akkhādam など (p. 325)。

<sup>22</sup> なぜ自説を証明するために異派の文献を引用せねばならないのか、という素朴だが当然の疑問は、アパラージタが引用している文献が (あるいは、シヴァーリアが言及する sutta も)、元から「ヤーパニーヤ派の聖典」だったという想定により、解消されるかもしれない。もっとも、ヤーパニーヤ派における

白衣派聖典の位置づけは未だ明らかにされていない。この点は空衣派も同様である。一般に空衣派は白衣派聖典の権威を否定したと言われるが、実際には幾つかの場合において空衣派の者が白衣派聖典についての知識を披瀝し、また教証としても用いることを FUJINAGA (2007) が指摘している。

<sup>23</sup> Cf. BKBhK (p.274): ekagrahaṇāt tajjātiyānām sarveṣāṃ grahaṇaṃ bhavati.

<sup>24</sup> BKBhK (p.274): yathā niṣpannaḥ śālīḥ ity ukte naika eva śālikaṇo niṣpannaḥ pratiyate kintu śālijātiḥ tathātrāpi tālapralambagrahaṇena na kevalasyaiva tālasya kintu sarveṣāṃ vṛkṣajātiyānām pralambāny upāttāni pratipattavyāni. もっとも、クシェーマキールティのように理解すると、実っているのはいずれにしても「チャーリ米」という単一の品種のみであり、他の品種の米が全て実ったことを意味するわけではないから、喩例として適切と言いうるか疑問が残る。

<sup>25</sup> BKBh847-848は nāma, sthāpanā, dravya, bhāva という4つの nikṣepa から tāla を解釈するが、語源解釈は提示されない。

<sup>26</sup> 仏教において異なる部派の、内容がそれぞれ微妙に異なる律や経が複数存在するのと同様の状況がジャイナ教においても存在したと想像されたい。

(かわさき ゆたか：人間文化研究所 客員研究員)